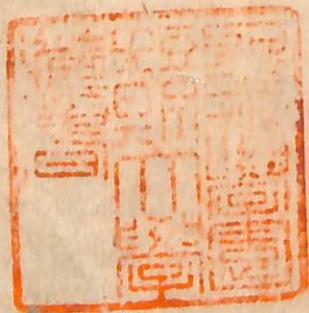


911.3

八

秋冬





秋之部標目

立秋 初丁

一葉

二丁

穀柳

七夕

初嵐

三丁

輞

絲瓜

木槿

桔梗

栝樹

百日紅

秋燥

槐糸

葛糸

つと入

三丁

盆月

柿籬

むし

きりぎりす

蛙吟

踊

お撲

稲妻

虫務

鳥

花火

お水

芋栗

芋栗

おく屋

乙秋

苺餅

雛以花

西瓜

八月

八朔

十三丁

三日月

稻

おぼろ

標名

未呀多十四丁 秋山 古林 秋子十四 秋水十五

芋 葛 豹素 鴈 叶表

秋扇 唐辛子十五 八月 秋風十五 野十六

小綱引 放生會 初夜 結宵 月十九

十六板十五 爲 秋日十五 秋分 葉山子

唱子十五 添水十五 麻 鴈十五 鶺鴒

砧十五 吹子十五 籠 隔燕 芦穂

秋悖十六丁

九月

秋板 長板 色之板 秋綿 秋酒

菊 芭蕉十五 露水 昔竹十五 樹

栗 辻堂 升市 秋雛 紅葉十五

古八十五 十三板 杜十五 秋衣 夜衣

未枯十五 移秋 木槭 菜黄 秋夕十六丁

西十五 九月十五

冬之部標目

十月

初冬初

時雨

冬日三

玄楮

麥苗

口切

野潤

巨燧四

火桶

埋火五

穴

婦人六

衾

豆袋

小春

石路花十

枇杷花

山茶花

達之息

十夜

清心溝八

夷溝

沙魚越

冬牡丹

掃花

海菜九

風

枯野十

冬野十一

冬枯

寒

楮

十一

河豚魚

夜與引

散紅葉

綱代字十二

莖菜漬

飯漬

頭巾

冬之籠

十名十三

水名十四

油麻

大根引十五

七菴

冬月 十一 神每月 十一 冬田 枯芦 枯桥

干菜 紙衣 納豆 六

十一月

霜 冬至 十一 菜食 曆表 十一 鷓鴣

雪梅 暖鳥 水仙 鷹狩 十一 魁元世

練 菊花 冬暹 十一 冬木立 冬川

雪垢離 鞋冬 髮墨 冰板 冰

雪 十一 霰雲 神乐 十一 冰鼓 十一 牡蠣

十二月

雪 寒声 十一 寒念仏 臘八 佛名

節季 十一 年内立春 追儺 十一 年菊 師走

仙 十一 拂 十一 年市 衣配 年忘

餅 十一 年 年暮 大晦日 終年 十一

園 十一 和布刈 宝 十一 年尾温交

雜部



幾句類聚

秋部

青顧廬了輔編輯

八景園寔松刪定

七月

上
秋

秋風此心こぬぬ獲とてて経

嵐雪

二三尺きり秋くるるももれれく

菊た太

葉たけの一はあいいりりの秋

六窓

秋きぬと同よささいいの輪のをし

故班象

陵り筍すみたらやけさの秋

柎紫

勢せれ秋さいくく河のぬもか

長梧

秋さや赤い葉とおももれれり

蘭室

けの秋とや秋を懸りり

完来

秋きんや井いさき方の流し血 吐月
 蚊の足も大事に踏むやばら秋 大江丸
 何もたつやいさきにまける時乃雲 登之
 ひまのや月毛の弱ききふの秋 月巢
 ちんねの吾んふめりりやの娘カ 巴明
 翔日此遊子秋のきりりや 木羽
 鳥あうくおぼさしーいさの秋 百鏡
 え弦のたーと切さしーけさの秋 芦洲
 秋もやねー入てー人のりよ 魚文
 蝉の羽乃きしーるけさの秋 一扇
 葦井の色流しーけさのけさ 提國

おと葉

散柳

七夕

年のくちぬおもけしけさの秋 楚水
 秋立小森さうのうかよ男達 寥松
 あき不のまふ中さう一はふら形 蓼太
 新とんー井く湯籠よ一葉小 吐月
 夏も後風さくく相い葉紫 午心
 何うもな雷をぬくつ葉あけ形 李文
 いさくや極いさーてち柳 蓼太
 一月まちーてさあうお柳り家 吐月
 ちん柳西の大寺今日入ぬ 六窓
 七夕奉降とおもあうお世小 嵐雪
 ちー合やささしーそのまきさし 沙羅

野合やあまの秋の日 和魂 不審
 秋夜は木とかがくさき 星象 故
 不^{コッ}合やともつくるる秋の夜 鬼陸
 早合や後の序入り 氷花
 明やすれき舞つらん 一板 簾太
 七夕やあまの夜も 完采
 もいそぬ急のげや 百舟
 七夕やいそぬ急のげや 露文
 喜お中やふらふら 嵐雪
 秋やいそぬ急のげや 蓼太
 舟投てともさきし 天乃川 雪凍

和歌 調

思つて書けり 文鱗
 鶴乃橋りけり 立冬
 さくらやふらふら 寥松
 照る日の中 京 嘯山
 日くや椋を渡り 蓼太
 畑乃名や 桃壺
 のくや扇を 莎笠
 畑や海す 寥松
 花夜月す 玉宇
 冬夜一被り 吐月
 冬夜や深き 慎車

木槿

枝折る大蜂のこゝろ木槿
おもしろ目も七つあり木槿

周竹
普成

薄き大派層のる木槿

蒲夫

朝ハ日の何くも木槿

熊菓

まじりや枯梗の家乃あゆみハ

蓼木

宗住子完のつ同ん木槿とき

吐月

夕のつれ秋のわら木槿

雪萬

くさくさ百日子のき木槿

故班象

りつたれをやまゆき木槿

蓼太

まきをたぐ秋のわら木槿

完未

目あつと人も秋のつれ

五舟

桔梗

百日子

秋槿

魂祭

白かハ只ふあつて何木の蝶 後二

夕暮のきくくして秋のつれ 月美

秋のつれつ集れハ暮るあり 午心

あき木槿のつれその下をこぬ 秋左

秋のつれそをたぐ秋のつれ 曉長

道芝やき木槿のつれ秋のつれ 窠多松

約清ふ目の何くも同ん木槿 盟鴉

魂棚の粟子先まきの字ハ 嵐雪

とま 火に日れ何くも魂祭 六窓

淋 きのあき木槿のつれ 岷山

夜よ入ると此秋のつれ 魂祭 吐月

燈籠

君の為細き浦の盃乃月
隈あかくて燈籠をねく盃の月
くお世の青ハ窓何を盃の月
人の森下後掃く門や盃の月
氣をさそふ人おおふ盃の月
誰記念にさ人定ん盃の月
盃の月見にさ書法く那
古くさ思つぬ月や盃の月
とささる新あふ門の燈籠
白骨け切籠燈籠のねた家
燈籠の故人は時けゆら

班象
山市
吐月
寥松
鬼秀
月巢
郷音美
山幸
嵐雪
完来
歌白

む

燈籠也二十日の時よ
とろろや消るも思ふ人如
都より暖屋あふたまき燈籠
甚よると家もき新の燈籠
おくと秋とのあそそら
燈籠や月ねたくねた
つる所のつねあき揚上
燈籠やまをさしたる
さるてく遠きあふ
系より中尾の下ふ
砂浜と夜更とをさす

沙屋
白麻
一葉
子出
連大
妻高
水衣
葉大
吐月
年ん
大に丸

夜夢少了都の中をまきくた
ねう枝うかけてぬつや花の生
時之世をまきくたか一のとき
む一咲や今年もより満りる
眸にまゆ細一む一の身
うりくくと雪渾や申のとき
ふ入るといふあやむ一かうと名
美あかふまきかきあきく
む一夢に又るまきもあきく
申のあきかきあきく
ねむ一や火をかきまきく

班象
菅雅
青福
吐月
指月
故班象
十曉
寒松
高家山
春我
普成

きりく

夜夢少了都の中をまきくた
ねう枝うかけてぬつや花の生
時之世をまきくたか一のとき
む一咲や今年もより満りる
眸にまゆ細一む一の身
うりくくと雪渾や申のとき
ふ入るといふあやむ一かうと名
美あかふまきかきあきく
む一夢に又るまきもあきく
申のあきかきあきく
ねむ一や火をかきまきく

寒松
東平
三葉平
業海
吐月
正急
人左
葉太
上葉鍾
吐月

情
吟

踊

空んほりやかくせれはる風のそ
林風に人ま川あけく踊く
子を持てて母を思ふおかしう家
踊くぬまあぬ月夜半より
踊く中七念の通る深世り那
踊くまぬ子に深河り益 踊
踊くつるまの上人えぬ踊可難
顔くまぬ人持てておかしう
角力あまぬあけぬわくわく
わくまぬ人多けやまぬいとう
大内少御をこまけや角力

紫衣 舞衣 雷丸 善人 加賀 湯池 年人 大江丸 陶家 嵐雪 浴儿 萱 葉太

相撲

是きりくありつるも何ん角力石
君の代の末まをあちれ角力
定捨ふ母あけまぬ角力
相撲あぬまぬあけ人やお撲まぬ
撥くまぬ大まぬまぬまぬい
十八まきけハおーヤ角力
勢ふまぬまぬまぬまぬ角力
皆角力あぬまぬまぬ角力
三十九まぬまぬまぬ角力
まぬまぬまぬまぬ角力

秋色 方壺 千雀 吐月 連大 六窓 其道 白麻 大江丸 梧泉 冬翠

箱妻

負すし如角力を疾ものころりか
箱妻やあをぬきしは海山
いまつしや枯れぬるものころり
箱妻や伊吹みつき木の湖
枯れしや 寝あき社のかや
いまつしや枕のいゆふ言の端
姥の団に箱妻やふ新湯川
泊人乃いさうしき方け常このま
箱きりやあう起たるは暮ふ
川 妻に枯れし上女月あや
箱きりやあう起たるは暮ふ

蕪村

吏登

蓼太

完来

二上

赤祖

故班象

長梧

儿董

班象

理牛

箱

箱きりやあう起たるは暮ふ
完来
山きりや隙子隙し松の明
鶴里
箱きりやあう起たるは暮ふ
翠羽
何れも終りしは中
寺橋
箱きりやあう起たるは暮ふ
可風
箱きりやあう起たるは暮ふ
嵐雪
箱きりやあう起たるは暮ふ
蓼太
箱きりやあう起たるは暮ふ
白麻
箱きりやあう起たるは暮ふ
石野友

活儿董

完来

夢松

鶴里

翠羽

寺橋

可風

嵐雪

蓼太

白麻

石野友

あふんとつ芳う病の一板うふ 不カ 梧泉
ふあてまけーきま成小松原 普成

阿ー然やあを消るも星をー 吐月

白あやふまことほまきくま子の上 治 蝶夢

ふ海のぬ壇地やあまのあーく 氷花

伐の中不柱の止何うあは秋 寥々松

障ふは中うまをや秋のあ 三千彦

天々うまもあめくねるもむたか 蓼太

園うーく推く方ーく花たう柳 深松

手えーくおの吹くーあをせし 子貞

花火

老の秋 嵐花火 千進をりく 寥松

さも阿ぬ方やあ毎のまを火 菅雅

ふあはふま折まを林ー女命を 蓼太

をーあー一咲るーりり男うし 菅雅

こるれくくまはたむーくまーあ 吐月

為る症瘡もいたく折るあま 班象

蟻の團や女命をーくまーあ 嵐亭

あまままーくまあ風をーくまーあ 至兆

ま折るま子折るたあ女命を 大江丸

早かーく風源ーくまーあまーあ 稻束

くーくま折る風源をーくまーあ 龜流

女命花

スルカ

廿二

若くして色あはる風のうめり
 その中に神を居りて若乃痴
 湯くわゆる人やはら—若のちを
 けいめい—歌日あつてや若れを
 若きや舞をまのりき 西に系 下後
 曉は時をほめや大木の窓
 け人の影きき若の垣根に
 若るをや林と若く—阿をれを
 若井や我ふれあはれは—き
 若の日の葉は花きく—り来は
 阿を—はや若舞起—てあま

月巢 素雄 一筆坊 寥々松 満良 杏扉 蒼虬 蓼太 魚没 夜兎 古調

若るを佛出あはれ是は—
 若井や曲水の流り流き—
 阿を—はや共—りて若く—月
 若るはのり—り—り—り
 若くあはれき—り—り—り
 あさうはといつ—り—り—り
 若るをや凡て盛に—り—り
 濃く若く—り—り—り—り
 若の本や明るに如の足ゆ—
 若井やけし麻を—り—り—り
 あさうはやさうあま—り—り—り

完来 月古 若橘 秋白 月菜 吐月 雪我言 若秋 希因 百里 連文

橋尺さく水田より花舟ハ
 果てしなくふき風と花舟系
 着るの糸日あかやきても水
 折つてもえやう清あゝを水の
 ちりあはれ川流るゝあゝあはれ
 なるをふとさるゝきりたれう
 つら〜りりたれあゝあ聖ハ
 情もこれ目もは流ほゝはのを
 ちりあはれ〜とれマサたれを
 けさろり日折〜〜とれマサたれを
 何れもさき後ひき〜于人あはれは

文足
 月巢
 月美
 寥松
 人克
 柵美
 節白
 蓼太
 吐月
 班象
 完来

新蕎麦

秋水

芋

新蕎麦は〜〜情〜梅の香
 新蕎麦は〜八月十五日
 骨折て物の心〜秋の水
 刺刀にあはて〜〜
 五尺尺岩のころさよ林の水
 海を衝 沖中川や〜の
 橋の滑〜〜林の水
 矢を自〜〜〜
 白〜〜〜
 手繰繩の〜〜芋北亮

蓼太
 文足
 雷堂
 芳里
 三鶴
 魚汶
 梅堂
 五桂
 寥松
 百里

葛

一付世一枯一老知此心小

弱牽

弱牽之日付て甲段の足男

鴟

鴟鴞也枯叶系江行自系

竹春

彼春竹臨有梅小叶日去

秋雨

秋雨思心付て陰影の部

秋雨思心付て陰影の部

秋雨思心付て陰影の部

秋雨思心付て陰影の部

蕃椒

蕃椒思心付て陰影の部

吐月

吐月思心付て陰影の部

敬我

敬我思心付て陰影の部

藜太

藜太思心付て陰影の部

合

合思心付て陰影の部

高窓

高窓思心付て陰影の部

太兒丸

太兒丸思心付て陰影の部

才了

才了思心付て陰影の部

藜太

藜太思心付て陰影の部

素迪

素迪思心付て陰影の部

漁舟

漁舟思心付て陰影の部

泉布

泉布思心付て陰影の部

寧寧松

寧寧松思心付て陰影の部

方壺

方壺思心付て陰影の部

藜太

藜太思心付て陰影の部

葛更

葛更思心付て陰影の部

仙菓

仙菓思心付て陰影の部

三思

三思思心付て陰影の部

藜太

藜太思心付て陰影の部

藜太

藜太思心付て陰影の部

秋風

くさけのそよみおのこ 霧の
晴るつ橋本をき 船路の
吹きおのそよみおのこ 霧の

襖卜
白酔
乙児

秋の風は秋の風 秋の風は

吏登

あき風やあき 湖に高帆行帆

吐月

芥乃又子秋風 橋本に

馬勃

秋風や秋の風 秋の風は

出飛
投茶

晴れ後まよ河れ秋の風

心祇

猪垣よふい樵振るあま秋風

寥松

人志の深心の障也秋の風

楚岸

あき風やあき 湖に高帆行帆

蓼阿

弦打て帆のそよみ 秋の風

完未

秋風や秋の風 秋の風は

午吹

秋風や日小向り砂川至

素迪

みよ秋やあき 湖に高帆行帆

梅人

あま風やあき 湖に高帆行帆

虚舟

あき風や柱まよ 湖に高帆行帆

深松

あき風やあき 湖に高帆行帆

故流

あき風はあき 湖に高帆行帆

馬身

秋風はあき 湖に高帆行帆

雁赤

あき風はあき 湖に高帆行帆

艸石

小雛引

放生會

初設

晴き日 風も和らぎ 男の子

走り回り 遊んで 大に

晴の 日 光 射し 入り

春の 光 景 又 眺め け

又 之 控 の 光 景 眺め

小雛 之 定家 の 光 景 眺め

編 織 之 光 景 眺め

八 舟 之 光 景 眺め

寂 生 之 光 景 眺め

大 門 之 光 景 眺め

大 門 之 光 景 眺め

大 門 之 光 景 眺め

大江流

吐月

臥

秋

秋

由岐

変

家

玉

兆

菅

川

春の光景眺め

大に遊んで

走り回り

晴の日光射し入り

春の光景眺め

又之控の光景眺め

小雛之定家の光景眺め

編織之光景眺め

八舟之光景眺め

寂生之光景眺め

大門之光景眺め

大門之光景眺め

桃祖

雪貫

螢布

普成

老阿

天府

参太

全

不審

柳絮

初秋の光景眺め

待宵

まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし
まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし
まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし
まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし
まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし

蓼太
故班象
阿人
吐月
午心
麥雨
嵐雪
全
吏登

月

月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし

全
蓼太
亘交
紗羅
深松
歌白
普成
月巢
六窓
方壺
文足

明月や雨く代くまはあま
名月や仲も米搗形跡
名月やくく宵盃も人おはり
明月や十なりけ滝の聲
明月や橋をたぐすも秋の空
名月や晴るの後にまきま
名月や晴るまきまの東ま
明月や大勢をまきまの
明月や園くく庭の柱の音
名月や也相まあくつまは
名月や燈を消る風かつかり

婆城
月菜
吐月
魚汶
宜麥
午心
故班象
普成
祇川
蒼瓶
蓼太

中秋や日安くま月おち
明月やいつくは園に人の音
名月や老も森まは城の
明月や老もまはぬけりし
いさ碁もまは四つは足んま月
いさ碁月人り西をりし
捨子居世まは居るまは月
曉のあまも何くまは月
隈あま心社の癖こりま月

文太
魚汶
蓼太
嘉好
月守
寥松
吐月
大江丸
司丸

初ハ秋ニあるハ月ニあるニ秋也
 此ノ秋ニハ月ニあるニ秋也
 此大名家多ク月尺ノ也人曰羽籠
 羨云々此ハ実ある月ノ月
 一輪此月ニハ月尺ノ也
 玉をもちて見ても今宵ハ月ノ秋
 月ノ若明れハ少秋ノ月ノ秋
 都 志々此ハ月尺ノ也
 而此月也 昔絶て 秋ハ
 世ノ事也 志々此ハ月尺ノ也

寥松 馬耳 月巢 吐月 青橘 文母 未光 沙羅 蚊牛 菅雅 楚岸

十夜後

山をさぐる秋ハ文科科の月秋也
 冬解也 秋ハ文科科の月秋也
 いさか月也 秋ハ文科科の月秋也
 十夜後やきのふ此実を言ふ
 十夜後やきのふ此実を言ふ
 いさか月也 秋ハ文科科の月秋也
 此川一二里ハ休也 秋ハ文科科の月秋也
 此川中ノ秋ハ文科科の月秋也
 此川中ノ秋ハ文科科の月秋也
 此川中ノ秋ハ文科科の月秋也
 此川中ノ秋ハ文科科の月秋也

完来 白騎 蓼太 吐月 金武鷲 故班象 嵐雪 全 吏登 青牛 馬光

あじりり弓矢のまやう原
四阿七穂千あゝたけく古層
いづちれきんを起るる都
きるとしてひもをよそく
そはくく日くし樹きるる
穂すき合以忘るる相ひ時
為りくおのりくし林原
おのれくくくさるるおすき
あゝくくくハたやそまなり
投入く風志つめりくおす
芒地合心とむれん風をく

長梧

吐月

寥松

魚汶

柑翠

素夕

蓮佐

大江丸

葆光

春鳥

名雄播

秋日

野分

松風の原に根よ何の芒一の有
花まきき羽まの衣を吹のまを
形のおきりたけを解く花層
あれくくくくくをりつ芒く
秋のりやとそむくく民の業
あまけりや櫻をたせ先白の
秋のりやそむくく高あつら
秋のりや人あそむに奈く鳥
二階くく山を秋の夕りか
あゝくくくくく日あり秋の
今を屏よ雨吹くくく地をく

菊参太

蒼虬

故六

牛晡

午心

千林

寥松

故六

玉桂

艸阜

菊参太

案山子

明烏斤羽よりしる世分の案
而折く世分を渡して降香
吹打て遊の末傳ふ世分は
今影るれを案の依家の世分は
大佛を白りてあくる世分は
人ん地つくや世分の隣部は
おれ系を色を足る世分は
芝坪の案に吹あくる世分は
人ん子やまの案の案は
案山子の案は
今案の案は

月守
文牛
白麻
吐月
蝶羅
班象
文采
木芝
蓼太
夜兔
六窓

おまゝ乃橋を案するが
百姓よりハマりて案山子
中流の案は
夕暮の案は
不細工此の案は
國西とゆかり中よき案山子
流系を案して案する
加茂川の案は
而此を案する
十月の案は
秋風の案は

案山子
午人
善山
甚由
柘茂
月榮
吐月
風宜
糸汁
橋友
画障

鳴子

ねをこめて道りくちまきか〜
 ちのう田ハ膏てま〜田ちハ
 腰ぬけの手いゝあはる鳴子ハ
 川河げてねの月ねや鳴子ハ
 六のよに侍てま〜あ〜鳴子ハ
 五十九〜上〜手ハあるあ〜鳴子ハ
 索あふふね友も何〜ん鳴子ハ
 曳てや〜ふ〜あ〜鳴子ハ
 而折〜ねまの字子まえは王
 鳴子ハ〜手ハ〜角〜あ〜有
 家ハ〜つ〜と〜に〜鳴子ハ

雪のあ
 吐月
 東登
 薬を
 海外
 吐月
 年人
 梅仙
 雪丸
 聖口
 吐月

添水

鹿

新風ハあを切〜添水ハう菊
 流あふれ拵〜きて水のり赤ハ
 引板深〜る園ハ眼の何〜雪哉
 彌き〜ねねアあ〜りり菘の考
 くらあおの〜あ〜あ〜け麻の考
 菘きけを〜手〜古あ〜すぬハ
 麻笛を都の人に侍すねあ那
 案せ合た〜笛〜管〜の言ハ菘
 鹿笛ハ鹿〜こ〜れ〜と名あり
 何ち〜向〜息〜あ〜れ〜蜂の麻
 吹〜く〜さ〜鳥〜月〜菘ハ菘

桑右
 吐月
 沙阿
 東登
 桑右
 桑右
 全井
 周竹
 言書
 月巢
 射集

上廿 射集

松山やまは中より麻のたけ
和々々みま本をけり麻のたけ
戸をきく遠山よせん麻の声
蕨のたけうしろ志くく月丸あ
小男蕨や河に流れて写る夕日山
ゆづり月あて息きき一鹿おき
湯や人さく空り一麻子備
清射山の月とて麻の写おれ
麻のまや月夜櫛士消人と守
啼よりの麻の身をうつ木の根や
念せは八木の陰宗ん麻の角

蓼太 簀丈 郎娥 我月 歌白 月巢 洗水 完来 石髪 寥松 吐月

鷹

然しきにせめて入ぬ麻の山
若此書やま一里と只いさ
風林ぬおふくくはまも乃麻
小麻まくおの雲禁く嬉し
いつの空に飛んで来り小田一
二羽くとかくく然し一山
一をうらひは田中くおひらま
をうらてや月の中一羽
遠山を今もあきく小田乃厚
さ花しは画文と免をやるは

蓼太 吏登 青橘 星衣 吐月 蓼化 蝶夢 雷堂 牧丸 沙笠

玉可... 可... 可... 可...
 吹... 吹... 吹... 吹...
 痛... 痛... 痛... 痛...
 以... 以... 以... 以...
 柳... 柳... 柳... 柳...
 柳... 柳... 柳... 柳...
 去... 去... 去... 去...
 乃... 乃... 乃... 乃...
 一... 一... 一... 一...
 乃... 乃... 乃... 乃...
 乃... 乃... 乃... 乃...
 乃... 乃... 乃... 乃...

葵 天
 洗 月
 雪 堂
 京 花
 嗽 石
 稻 牛
 班 象
 柳 莊
 寥 松
 撫 琴
 午 心

流... 流... 流... 流...
 去... 去... 去... 去...
 去... 去... 去... 去...
 厚... 厚... 厚... 厚...

双 鳧
 牛 毛
 歡 支
 可 月

鶺鴒

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

都 重

鶺鴒

同... 同... 同... 同...
 極... 極... 極... 極...
 友... 友... 友... 友...
 獨... 獨... 獨... 獨...

蓼 大
 錦 衣
 是 狗
 吐 月

衣うの隈遠侍乃女の那
風ありにおもふまきまき碇
公うしを取てありぬ小碇
里人の温泉よ来て後小碇
黒髪友女顔くおめきぬ小
啄つきの里とありた碇うか
んこくくらん月のか衣
母乃碇をたけしぬくまれ
直きより赤碇うり小碇
き里女都よま耳つ碇うか
是よりしとま波よせ碇小

完来
子交
夜鬼
午心
文足
不鷹
寥松
蚊牛
其由
蓼太
全

松上月尾とり碇字之り
掃やむハ碇うかといさむらん
をよきれたる月さきまき小碇
お有りて碇のよきるお有り
くち何けく浅月琴志名小
そは京乃木のりさく小碇
その山木をよき碇うり小碇
あまにほむまのまきく少おきぬ
あまおれ碇さの里んさよ碇
うちしお乃ほくせん長土碇小
しきやゆりしありておひし

虚舟
文足
露澄
不鷹
達琴
歌白
木丈
普成
月巢
吐月
管雅

烏血

一發打ふはち一 月日笑
いさみいさみいさみいさ
おのこをいさかきかき
馬血あふはちいさいさ
送一はに松竹いさいさ
短刀に短衣いさいさ

鱸

鮮魚いさいさいさいさ
鮮魚いさいさいさいさ
鮮魚いさいさいさいさ
鮮魚いさいさいさいさ
鮮魚いさいさいさいさ
鮮魚いさいさいさいさ

帰燕

鮮魚いさいさいさいさ

芦穂

芦の穂いさいさいさいさ
鮮魚いさいさいさいさ

秋坪

秋の坪いさいさいさいさ

秋松

秋の松いさいさいさいさ

長夜

長夜いさいさいさいさ

鬼奴松

鬼奴松いさいさいさいさ

大月

大月いさいさいさいさ

班象

班象いさいさいさいさ

寥松

寥松いさいさいさいさ

全

全いさいさいさいさ

完来

完来いさいさいさいさ

寥松

寥松いさいさいさいさ

郎娥

郎娥いさいさいさいさ

蓼太

蓼太いさいさいさいさ

吐月

吐月いさいさいさいさ

方壺

方壺いさいさいさいさ

鬼奴松

鬼奴松いさいさいさいさ

鬼奴松

鬼奴松いさいさいさいさ

文河

文河いさいさいさいさ

帯村

帯村いさいさいさいさ

班象

班象いさいさいさいさ

一語

一語いさいさいさいさ

美築

美築いさいさいさいさ

風竹

風竹いさいさいさいさ

幽羅

幽羅いさいさいさいさ

心

心いさいさいさいさ

新綿

新酒

菊

色之ぬ松 古き立き奈良此系
 目を友おしき色之は峰の松
 里ハ今強あしき日如小
 まいとの指ねをまひしあ孫取
 永きし新酒ハ人乃疎やまき
 凝りん新酒の泡子ちるたは在
 去し酒園まきいふまぬあり
 美と菜志きくそ外の名存り此
 菊好や八日不期て持より新
 公ましや手打んとは系人乃麓
 出さくてあは定りや菜の花

桃鏡
 松 欣
 蓼 太
 吐 月
 嵐 雪
 寥 松
 了 浦
 嵐 雪
 吏 登
 天 府
 藝 太

上菜此酒吾おひりりは新名
 了る日心城あまをて人海色と菜の花
 雪哉尺の篠も有しきく此菜
 兼をて尺しやと菜刈あるしり家
 同し日おひりりきこは菜はを存
 きくは尺ふ先者未をせ切りあを
 是菜よあ持豆腐しつらぬ山里吾
 名きふも亦志飯お阿りきくの世
 折らぬる花しつらぬと菜乃宿
 大膳と帝よとせりあまきしり
 投てりし謀乃き久を味せたり

青牛
 月 守
 人 左
 方 壺
 雪 珊
 阿 人
 沙 羅
 一 兆
 一 鷺
 月 巢
 了 浦

詞伽よくし葉小吸葉の信ハ
か一ちと写子もつちけきくの花
ふきくわふきを深し秋も葉一
り先子竹一の友也葉のたま
あききくや葉子と葉あつくりん
地をあし風志めりり葉のを
三月しち多れも葉あつくりん
葉の葉葉に秋もふきく竹也
とつちも葉内もむりり葉の花
きくの葉も明れたちき 取美
ふきくや葉もむりり葉あつくりん

人左
月巢
文母
百貢
鬼秀
鷺川
兔洲
千牛
頓吾
雪萬
虛舟

と葉あつくりん 月 若葉あ
きくいろくもあふおに度りり
あつくりん小松の中れ葉は
捨嘆の葉もあつくりん
龍もあつくりん人の好もあつくりん
あつくりん仙もあつくりん
詩をもつくりん葉あつくりん
あつくりん月日はあつくりん
あつくりん一漏れ葉の上もあつくりん
白葉のあつくりんあつくりん
あつくりんあつくりんあつくりん

班象
宜麥
寥々松
山松
夷門
百里
周竹
鳥醉
大江丸
北魚
完来

きく候や 容り 燐の 雲より 福

鷺雪

芭蕉

淡より 家より さくも 世に けし
あつと けし 家より さくも 世に けし

蓼太
蝶夢
文足
草石
午心
普成
三思
蓼太
音橋

洛水

茸狩

用の かい 目れ 世閑 之 後 一 あり
後 一 水 是 ち 杖 也 かつ ぶ き ぬ
吹 折 せ の 木 を 投 擲 せ ば 後 一 あり
茸 かり 七 葉 い 衣 ハ 侍 門 路
ふ ち 茸 狩 也 けし けし けし けし けし けし
茸 かり 七 葉 い 衣 ハ 侍 門 路
ふ ち 茸 狩 也 けし けし けし けし けし けし
たけ けし けし けし けし けし けし けし けし
茸 狩 也 人の けし けし けし けし けし けし
神 あり けし けし けし けし けし けし けし けし
けし けし けし けし けし けし けし けし
志 留 村 けし けし けし けし けし けし けし けし

月巢
秋杵
吏登
羨玉
女須美
銀俣
吐月
夜鬼
嵐雪
吏登

柿

栗

辻宮

井市

秋離

きの葉も時久しく柿は木末小

流柿よりよもろなり鳥よか

いらくりやまにまけるはの場

作麼生と焼栗たまふ小寺川

人志しぬ水お捨り栗は越

後より七子供つくるは洞

辻宮や作く井代の雪意はし

松風市より孫より井の市

おは秋よ冬ふまきし石の鈴

紅葉

花一枝折ありはる秋の鈴

人ありはゆりちありまきり

山をくるとるはては紅葉

さし木乃柿をさし出た紅葉

か入た色はるあまもさるゆ

いつたりはあき山を捨り初る

そあまして海よりつるり夕も

一山のまは海よりつるり夕も

りりるに度しぬあや夕も

人の舟よ六洞きをもちあま

さるは根をさるはあま

蓼太

二柳

嵐雪

月守

午心

月窓

沙羅

雪漁

午心

雪守

蓼太

花調

子真

沙羅

山土

春鱈

普賢

故渡

得魚

歌

漸春子 逆枝 ときとみちの
妻木つ出里人 ときとみちの
洛外ハいつしとれとみちの
おほいなるときとみちの
ときとみちのときとみちの
幼ときとみちのときとみちの
う敷て月のときとみちの
寺門のときとみちの
砂をくく備あつときとみちの
夕をみち照やけふくときとみちの
細くは敷て門のときとみちの

一海音
白麻
婆心
深松
富屋
山辛
完来
宜麦
繁松
意長
ト水

さい結

手折ともそくときとみちの
揚河くくあふ川ヤメあふ
風むくし子さくときとみちの
手折ともそくときとみちの
かきくときとみちの
あふくときとみちの
かいときとみちの
飯はくときとみちの
あふくときとみちの
川くくときとみちの

吐月
午心
枝並
夜鬼
大江丸
沙舟
嵐雪
天府
山松
子代女
葉太

待せぬも月の光に十之在 月巢
 かくぬくも水やほまらん 吐月
 今満くもくもくも秋や後の月 完来
 後の月子より夕を離れん 普成
 窓をぬくもほくも月を名残に 貞花
 此のさき此は只日暮る後の月 沙衣
 空を腐るのせふ持る後の月 翠松
 持る後の窓をぬく後の月 夷門
 下戸へ来る扇の風や後の月 花明
 帷つぬ心よ秋何のち此月 蓼太
 月走も花をなまし十之在 不騫

柚味噌

秋霜

夜寒

秋もすくも横影をくも後の月 普成
 袖をけて里路をくもち此月 蓼太
 秋何のちやおまの柚味噌も柚より 今
 柿の心轉るも柚みそ耶 普成
 柚みそや淋しめ心友よちの 歌女
 秋も葉や落の中くもくも此は 寥松
 つくくと秋をり人や秋の葉 北阜
 四十も酒のちおまお秋をくも 蓼太
 細布此里くも心でおまもくも 人左
 富士もくも園に徑身つる秋をくも 萬鈴
 秋もすくも横影をくも後の月 普成

中か、まよふ火のねまき
 洞桶を屏乃くくねまき
 淋のぬき焚火けくくねまき
 り焼く蝶の孫にまきねまき
 柳よれをまきねまき
 痛と神子まきねまき
 浅月にまきねまき
 大根の風味まきねまき
 漏る瓦焼まきねまき
 ねまきまきねまき
 行信れ掛ぬ葉もねまき

蓼大
 完来
 亀二
 吐月
 三駱
 夷門
 時中
 五明
 寥松
 五柏
 普成

未枯

未枯や月れあれく日のをれ
 うく枯や海のくはくくは
 未枯やまきねまき
 うれやまきねまき
 まくれやまきねまき
 未枯やまきねまき
 うく枯や鳥むむむむむむ
 未の秋曉のまきねまき
 未のまきねまき
 秋の落人のまきねまき
 風心まきねまき

蓼大
 吐月
 午心
 京花
 木奴
 蕪村
 珠月
 吏登
 班象
 春蟻
 秋鬼

新秋

つと入

木賊

菜蕒

秋夕

志しき花をくさす秋の富士

木陰より通うる足は秋の夢

秋まじりぬもあまふはたぬを

賣人より看て足せり濁酒

片と入てる玉子後さきれり

つと入る人よ阿の松子ゆけ

秋もをちふしぬきとくけり

山守の菜蕒を喰ふ鳥の家

玉出てるらむりやあまのくれ

隣りきよのやも足さき秋の夕

津守のぬきやうけ 秋の暮

蓼房

竹阿

走芝

是物

儿董

蕪村

五明

乙二

嵐雪

蓼太

宜交

秋のくれぬきやうけと思ひやり

こちより向にまのやうに秋のくれ

老翁よお女さきり秋の夕

翁よ此のやうにふくや木乃言

とあててる足りのやあまの夕

日暮るにふあまの足は秋の夕

やまをさしむる山をさし秋のくれ

魚をゆき笠を忘れは秋の夕

刀帯も危掃く人やあまの言

吹簾の浦よ人あしむきれり色

入おをつくふ小枝のくれさきり色

漢心

蕪村

班石

月嘯

水鶏

伊連 竹富

蓼太

拾羽平

木羽

雁路

午心

秋のろれ石山さすは 清のそは
 道回しは一里くとあまきれ香
 清つぎにいづれ下まぶれ枝のくれ
 秋のくれ女房のほくらん付たり
 何と云ふ物も尺くは 秋のくせ
 夕多てく秋高き松とあまりり
 門きくく傳の角カやあまきの夕
 見まとのせまありり 秋のくれ
 とけもあまき 圓の傳りり 秋の夕
 秋の夕死してき 燈ハ女ノ那
 角カとる直さ色もけり 秋のそ香

嵐雪 蓼太 魯洲 氷花 月巢 吐月 秋良 蓼主
 天社庵 寒松 故班象

清のそは 淋し 秋のそ 天房
 秋のくれ 梅乃枯葉に襟子也
 あまき夕みりり 傳借りて度りり
 神掬くもれまらり 秋のくれ
 ほくくは 向かもまやあまきれ香
 報急けお都のひりり 秋の夕
 けりけり 犯しとまあまきちくれ
 行麻人まつり 舞や秋高き夕
 紫陽花乃葉のほきりり 秋の夕
 杖曳て何とあまきの夕とあ

月彦 眠石 月窓 掃景 故六 普成 信夫 菅雅 蓼太

行秋

申く秋や連とよむおとすも
り秋は為と多にほりけり
り秋七も一をとおしたる有実
ゆゑ旅や水田は身て山の月
り秋や人子苦此おのり
り秋や雪のりら乃菜大根
り秋にみくもあはる藁 椒
ゆゑ秋や雪のり通す種のはひ
船控へ秋をりてさ上川
秋おむねま秋ふふの蟹の宴
嘆のるゆつて秋のりあつ南

更み豆
不審
叶月
竹條
歌白
富屋
桃壺
南羅
夜兔
訂兩
翠兒

九月盡

と秋のりて川をる人や雪の秋
をさや秋末のゆき秋をゆく
碓くは是袋屋へ秋のりあは
あ程せー川風をる九月を
秋の院のゆきとわさる九月を
夕くれをば集て九月晦日の舟
何思ふんそ九月三十日は秋
油打のけつきとあう九月を
左あやうにあらぬ都の九月を

桂直
素迪
乙兒
連大
桃祖
木羽
素迪
大河
完来

北段句類取

冬部

十月

音顧盧了浦編輯
八景園寥松刪定

初冬

初冬の横ふ入るやまきりけり

夢冬

時雨

のつげよ日の暮るるは時雨

更雪

極まじく松を志ぬくや初

夢冬

鳥来むらふ葉に天を思ふ

吐月

又まじく松を志ぬくや初

乙児

夕暮る子別し松を志ぬく

沙羅

二つや北山し松を志ぬく

日守

いふ一の時をせんせうと松
 時を来り又志をけり夕の那
 きらくく一室をを懐く如時白
 是よりあそぶ京の唐に世神りれ
 降るあて松をたまわれぬ時白井
 花子と人淋しとせうしれれ
 春豆のあはれ時をわの那
 卯のあはれ時をわの那
 豆のあはれ時をわの那
 色も香も志をけり夕の那
 花子と人淋しとせうしれれ

宇平
 完来
 大江丸
 午心
 仙菓
 雨老
 寥松
 菊盤
 藝大
 班象
 莎笠

小室の家の中へくときの時を
 傘持下り日乃漏しれり素
 夕練して園をくときの時を
 卯のあはれ時をわの那
 軒のあはれ時をわの那
 松のあはれ時をわの那
 やうなれとくときの時を
 おもひやいつくときの時を
 是きくときの時をわの那
 小室の家の中へくときの時を
 傘持下り日乃漏しれり素

春州
 波光
 連大
 也
 迄賀
 文鱗
 六窓
 文交
 吐月
 銀身
 成義

西山を為すかして降る時 川上氏 不白
 阿のきし いそぬ老をいつ時 鳥 月巢
 清き水もききさうのり し 眉山
 何人の梅の枝をそふね し 蓼太
 神のすゝ古休をわき し 蚊牛
 積のまじふおきりて し 講物
 あゝ海やあまて し 王牙
 鸞をそはま し 蓮依
 一ふれ中 し 素迪
 心 し 四明
 い し 射集

冬の日

秋の葉の赤きま し 菊雅
 一 し 柳如
 け し 葉太
 冬 し 更冬
 文 し 夕葉
 冬 し 沙南
 冬 し 柳紫
 冬 し 菅雅
 冬 し 梅堂
 冬 し 派雪
 冬 し 荻後

大桶

跡印して匠者のあしひのこり
猫ひらり入て四睡のこころ
さう繚のせかりさむる巨魁
一本 征多 仇まてこり
君代ハ 奴もさくて巨魁
さひしつとらまうの巨魁
ふとむも 吹流さけ 流さけ
然もさきまよふ 辰成さこり
こりぬぬ 友女の中お大桶
きく流さけ 大桶 小流 舞扇
さうさうさう 柳 大桶

五月
四月
三月
二月
一月
十月
九月
八月
七月
六月
五月
四月
三月
二月
一月

おしすう 控さよふ 大桶
陣七行 かけたる 大桶
傍心も 急乗よ 控さけ
むつし 世やし 大桶 抱り
日わつし 世あら 柳 大桶
よきな 世あらし 法や 柳
あつし 手にさき 柳 大桶
柳さ 訴ささ 大桶
さき人 手にさき 柳 大桶
法家 入て 宗法 止の 大桶
さうさう さいさて 大桶 柳

五月
四月
三月
二月
一月
十月
九月
八月
七月
六月
五月
四月
三月
二月
一月

埋火

居候遊て岩すおす大浦ハ
朝毎予朝りしき大津ク赤
くく大や床子心の古反古
埋火七字身たつおつて畏
くく古や耳ぬんは先い
埋火や似博ふうあてし
又しおセ岩をて岩を碑く
岩電やよ七折りてしきの松
岩多や息く淋一岩乃枝
深山木や又墓ひちと碑く
山岩七毛きを後の岩く

月古
金龜
故
百理
阿
人左
茶茶
吐月
舞牛
連牛
木奴

山灰

山灰をて科あき里へ度り
まね岩や後之影く又い
枝岩や深山おもつて岩の角
似博の岩くねむくまとの那
山灰くく山一て山ぬあおの病
山灰手あまの山子あのみく
山灰の大や孫足之の墓城掃控ん
山灰ん足く持るあや山
山灰つた山渡くくまよ紙袋
まろくくまよすく山紙袋
まろくくまよすく山紙袋

布園
倉衣

完来
巴人
宜麦
年心
山今松
六之来
差特
山今松
茶茶太
茶人
鳳石

あまきけとやよもの紙念
たふく此樹と若く念ふ南
我子易かぬ念もすむもの
あともて心せよふはゆい
らも若せて物流るる紙念
らも若お争ひをむふらん
古は念のゆすに念を踏ぬ
山は念樵夫の念も念の所
念も浦の念念の念も念
神んも念んも念んて念
物いも念人の念も念

美次魚
文是
念松
素之
善成
社月
念念
那象
吟月
此思

足袋
小春

石菖花
枇杷花
山茶花

櫻うけて念も念も念も
有明く月も小春子連日
梅をハ夕日此も念も念も
二日星と日障て小春の那
枝芽や鳥は念も念も念も
小春の心かろ念も念も念も
梅木念も念も念も念も念も
り念も念も念も念も念も
淋も念も念も念も念も念も
枇杷の念も念も念も念も念も
つも念も念も念も念も念も

霜記
一語
吐月
年心
念松
月念
念木
念雪
念木
梅也
吐月

連之忌

山家老やをのれはくけ花の巻 午人
 きんあや一ア人嘆てその忘 多お
 折りいふも山家老ハ冬木ト 象松
 逢之忌や鄭然く引茶大相 蒸太
 逢之忌やうほし度柔も十指 吐月
 逢之忌や壁に船のあゝ破き与 完来
 逢之忌や人乃又舟ぬ五日月 午心
 我恋と波女とにありし十夜ハ 蒸太
 家と老の十ね子刺て七字ハ字 文足
 十松く母あゝ児とおをいりり カッサ 文牛
 逢之忌はありのこもき十ねうと 川河 郎

十夜

暁の風岩林君たてゝ十松ハ 吐月

古今講

夷講

古今講子あ房ハ幼日と振り カサ 江魚
 ありとて紙衣をたけり 夷講 六窓
 夷講智の上戸を又付り 完来
 ふし振む仇の長きよ夷講 大江地
 夷講海嵐は骨にありしハ 文足
 輝ゆも急の何ふし夷講 一鷺
 七ハ巻の振折しハ出ぬ哉 完来
 此も戦終れハ世も何し 菅雅
 喜とくばあはれみや冬牡丹 萌太

出ぬ越

冬牡丹

風

旅人の懐ちりりたる風はふい
 山間子吹合せりり夕暮れ北東北東
 都るに秋き北つる葉捲
 一日乃風速く葉捲る
 葉捲る津久世を語りし
 木くりに楮の材乃名跡し
 風や流せん人えぬまは系
 木くりに水も流るる北月
 木くりに土も喰入るる松
 風や風を七月の小お嵐
 楚相

改
 慶西
 至北
 完来
 蒨笠
 嵐雪
 史記
 葉太
 吐月
 楚相

枯野

木くりに口冷をめて小略
 風の樹り根も何くもりそふ
 倉門の風を流る風日し
 こくりに土ぬいし岩を漕
 木くりにのちくもるや山の音
 風や何れも世もる帆くし帆
 こくりに風を大くちりて定山下
 風乃樹を割る月ねる那良
 木くりにや公招の上る園の妻大サカミ
 物来は松見ており枯れし
 人通るおんいのおれ枯れり南
 菊
 松
 祇川
 巴明
 秋丈
 蓼多太
 都本
 柏庭
 南山
 吐月
 蓼多太

冬枯

お庭の孔雀をあれを北に
伐たせりあま木崎り冬枯
冬枯や七落子何つらう田之反
あま枯や日れ新きよ橋枯
冬枯や替女のあまつら
鴨乃つら毛をよ何し
天の川を何れぬまききり
り燃し新割の廊の空
空よおや人子幅あまつら
家ありとあまをよ山の後
連のあまつら

沙路
寮松
者而
轍之
満良
吏登
月守
班象
玉水
乙二
蘭秀

措

顛

梅壺を学むわすれを
措を孫てふれをちきり
措の大や君在ぬ大 山 刀
埋本よ度ぬぬの措大
我門とてふのあまつら
朝明や四あまつら
十月を飯の月とてふれ
多老福者や入りぬけ
朝もや飯のあまつら
ゆけやとてふの友
飯けや人子とてふの

了補
寮松
岩水
参助
左株
鳥兆
月巢
大江丸
吐月
牛心
祖東

直典引

散紅葉

縁之を佛もふもあはれり
 めめしきお奥の大おまほひ
 三井の藤字て下りしお奥引
 春江く門の何れもあはれ
 帆仗のよおまちりし追風
 かく深き河の岸はさよちの
 春江石の風は中こちりも
 世のりのたのれくや細代
 なききくみ人はいし細代
 世の中お子は佳く人お細代
 さへ判るんともあはれり

大江丸
 氷花
 定来
 藤江
 春江
 吐月
 藤江
 藤江
 大江丸
 定来
 春江

細代守

中

中へは 啞しかしめり
 世はりしと只ふても細代
 溜控る思付をあらり
 さふまのよせて老らん細代
 浅月ふまをる居也何る守
 あへん本やちりし朽も
 君はよもあまのしき
 草はまは清の智のまふま
 唐の尼のまふりし清
 清の齒子透通る男も那
 よあはれり夫のまぬりし

共茶漬

何さつけ
頭巾

中へは 啞しかしめり
 世はりしと只ふても細代
 溜控る思付をあらり
 さふまのよせて老らん細代
 浅月ふまをる居也何る守
 あへん本やちりし朽も
 君はよもあまのしき
 草はまは清の智のまふま
 唐の尼のまふりし清
 清の齒子透通る男も那
 よあはれり夫のまぬりし

春江
 藤江
 吐月
 藤江
 大江丸
 定来
 春江
 藤江
 大江丸
 定来
 春江

冬籠

似憐の多ふとれて此中う南
既中留る月印るつぐま集るん
およきくと此中のたつて海一毎
まぬ人のいふと目したつて此中
おもひよきて月見よあつるを
火吹林もひつるにけよ冬こり
羽筆のこころを果よふゆあま
陰櫃の櫃をこちりりるを籠
燈よおし松を身よを籠
冬こころを吹てはうりも籠りり
志川ささしあふささ何れを籠

蓼多太
蕪村
對賀
金井
蓼多太
六窓
吐月
完未
象多松
青牛
月巢

りも七多んと伸一たりを籠
多列を甚まきとあつるを籠
す一何とて人の中あつるを籠
業あつて慈とつりあつるを籠
まより子たあつるを籠
けりあつるを籠
字は山やたを籠
茶畑よあつるを籠
冬籠はあつるを籠
又一もあつるを籠

北阜
商成
之子美
梧泉
雪珊
普成
甚夕
川居
秋杵
師心
文足

千鳥

我子揚子ゆくりりまをの
を一分て月さきあきわくふき
志はしくい江を全おま何川衛
をきききり者何の浦きい
流りくや盒子ぬきくく川子き
月をくく又波子きけうの清
子ききき相をいり汁わくく山
浦よき友にありりん川子き
進りけりまを風とわきき
川きややくまふふあく衛
ききけりんまをくくききき

曲 臑
蓼 太
完 采
達 琴
枳 怨
樂 我
月 泉
文 母
茶 籃
牛 毛
其 時 雨

水鳥

杉風の沖りり度ふきき
似くくくくくくくくくく
子ききき後くくくくくく
虎ききき浦くくくくくく
妹くくくくくくくくくく
友子きき月おハ又えて妹くく
十はくくくくくくくくくく
終鴨のあきりくくくく月を
鴨をくくくくくくくくく
水ききくくくくくくく
あくくくくくくくくく

東 芽
六 窓
蓼 主
方 壺
塩 車
蓼 太
寥 松
嵐 雪
蓼 太
司 丸
年 心

海嵐

月をねむれぬ七草海嵐の
砂の中をまゝ遊歩り海嵐の
色も赤も白もさあけりあまこ
字おのれ海嵐の家をまゝい
うたふれ泡やまよこに接せん
大根川よふ果をまゝいれり

木羽
月巢
吐月
午心
松欵
菅雅
柴立
大江丸
吐月
嵐雪

大根引

月をねむれぬ七草海嵐の
砂の中をまゝ遊歩り海嵐の
色も赤も白もさあけりあまこ
字おのれ海嵐の家をまゝい
うたふれ泡やまよこに接せん
大根川よふ果をまゝいれり

沙羅
吐月
因是
完来
月巢
我友

土蒸
冬月

土蒸人のあふくくれつ七草
冬月をかきとけりかき卵
冬月を搦る木系はあまこ
冬月をねむれぬ七草の月

寥松
大江丸
普成
寥松

冬に此月人をもたおれて遊ねり
ふ色の月山本くき木の月
冬月くくしとおまおまの程
くちさて水流るる冬月
徳よりしてお整しうん冬月
法をさうして冬月おれり
冬月啼声の鳥の死ねる那
おてんねた我は思し冬月
冬のおち月のおまのあひう
天孫の船浮世を冬月
門あけし後もいん冬月

吳聖
鳥山
蚊牛
陶京
沙飛
了臺
嗔長
良娥
蓼阿
之道
深松

帆柱のおよよあふふ此月
夏人かたたりぬ癒せ冬月
とさしてんんえさやくし冬月
いしつてんんまぬれ冬月
冬月みとういん子うくく冬月
あしきましりあ足つ冬月
いん麻子障りし冬月
くしあし心のほふ冬月
冬月おれり冬月

青朝
鯉半
雷堂
雁赤
系丸
梅堂
一鷺
曉長

十二月

十月のさめり人あし

完末

みら田

木の枝ふき葉を掃りて冬田うま

吐月

枯芦

枯芦やりをかきとり余りやう

吐月

枯柳

枯くして月を柳の浅根うま

藜太

糸と我糸を浮らんりき柳

器文

枯てくをくまはゆ柳

鳥北

糸をの久透てきし枯柳

李蹊

干菜

たふくして乾糸を淹り干菜を

藜太

糸を煮るハ作の行くふし干菜を

野叟

紙衣

裁厚し淋しぬれた紙衣を

藜太

今ハ世を裏かしてきか紙衣ハ

朽木

奈きぬく久しきりきか紙衣ハ

鬼守

糸を倍す乾しおくと紙衣ハ

吐月

糸を厚紙を急てぬ紙衣ハ

班象

糸を掛し種や紙衣ハ

去門

糸を久甘ぬ糸の穂線よ紙衣

完来

納豆

納豆やうてハ豆をて左い

午心

納豆も煮てつくと里乃家

寥松

納豆の月を煮何し納豆ハ

三思

十一月

霜

霜の嵐やつとむき美味倍

嵐雪

茶食

丹頂の朝日いしく冬至は
竈神乃松主也了冬至は
多々朝の石のふらふらて冬至は
いふ一乃初日のまき一冬至は
下初等り 斬きくこ茶食
月をた小宿おひやくまう喰
能多き老と老は味茶食
是七又老と一麻丸茶食
くく也上厨はたき一茶食
家も我死し相つらん茶食
うんよひいし一老と茶食

吐月 寥松 丈水 路茶 蓼太 班象 蓼主 君山 月巢 文母 吐月

曆賣 鷓鴣

寒梅

茶くひ花の毛衣くくや
くまう喰くくく人の子こ
曆くくまももま目まもふ
海く餅にまふくくや鷓鴣
おぬふくくお拾をせんま
みまおお垣子人と吐く
蓬草の心まぬまぬま
寒梅やまもくくく花の上
行持をまくくくく女む
糞尿の時まう朝や室の梅
人まうくく子まうくく

蚊牛 菅雅 寥松 吏登 蓼太 吐月 之厚 蓼太 鳴鼻 連丈 信申 杉明

暖香

室梅やんれもく松と似
冬のむし月もあまきう
行梅々日のあもんを
凡之ぬんも何れぬく
志すくハ着て飛ん暖香
東より命ハもれぬく
聖智探りてふハ人暖香
ぬくあも暖のまねは入
水仙ハ暖も何れ人
ぬく志け世も背きく
水仙也相もも玉のたれ

雪武 秋兔 班象 蓼太 吐月 午心 司九 大江丸 吏登 魚文 蓼太

水仙

鷹狩

顔見世

水仙也花子多し
水仙也多し之咲也
水仙也まき中より
水仙也花咲き
助也花
川中
夜も
枯草
顔見世

普成 配摩 月巢 吐月 花笑 蓼太 大江丸 魚汶 水鶏 沙羅 蓼太

鯨

鯨のせやいふはしるも
初めせやきりて花
顔のせや見えしはく
の月みせや子ありし
蒼芽みせ松も生けし
車揚て海ありしは
初をんふし人の花
葉の花や強河もゆき
葉の葉や一畝の葉
葉の花や日ふ能くし
葉はもや大根自き

山市
一鷺
其時雨
吐月
月守
海曉
雪山
完来
豪山
了浦
蝶夢

茶花

冬 蠟

冬 木立

冬 川

寒 垢離

雜 冬

影 姿置

蠟のてりてをるか
この川はつまありぬ
雪のてりて馬の
冬川や枝のありし
世は積りて里を
雪垢離やうき
花のてりて
根のてりて
ぬくも
影姿置

寥松
社月
宦嵐
維迪
豪山
午心
班象
氷花
夫丸
蓼太
吐月

氷柱

世に雪や児を抱せし津の松
帯とまじりて多しきくは海
うらやまの先を舟にやて御元結
即ち帯一入れば氷柱うそ
同しねの長繩あり沙粒に
五二の間海ありて世に抱く南
氷の輝の池のくまの舟り東
まね中よ氷の上は捨小舟
浪をよて氷より舟や急の店
松川や氷の上は汝うら
津のくねかきよの氷の

大江丸
何也是
斑象
葉太
以月
月葉
葉村
葉太
以月
茂鳥
而也

雪

木は雪を吹雪や氷乃影月白
門の雪白と鹽乃すししとふ
ま〜ま〜や大名すりり遠に
物大を尺ねを風ありねの雪
あ〜海の文了ま〜ま〜やね乃雪
ま〜雪をよま〜し〜又降松は
大川をよ人の様ゆい影の月
るんま〜ま〜るん〜し〜雪を吹
た〜ま〜入て風茶〜おの雪
降控て雪より雪のま〜川
ま〜ま〜や先つ人系乃松一本

之雪
嵐雪
吏登
葉太
連太
魚紋
桃隣
月葉
葉太
之雪
山雪

ありやふふ新をくそは松
以月

山越してふとれたるひや雪は雪
月古

松子と雪と五人かゝりや雪は雪
古松

廻きとあそび初つれをたふ
又は

障喜ハ中へはきねやあとの雪
築松

を尺五丈をそとありをた系
不さき

をぬの中にくくをた馬士
松冊

月よあそびの松馬あすこ
まは

松松松や雪まこほるそはけ
大江地

門の雪竹川起すまをそはけ
松松象

伍あふふりおすそはの夕りか
松松太

を月をふとあつて二日月松は
故流

松まこまそつとつとる松松松
松松松

あそびや園の松は松松松
松子兄

まは先きふ角力の松をそはけ
月松

あのをそはけそは松松松
松松松

夕らまやそは松松松
木松

あそび松の松松松
方松

松松松や松松松
松松松

霰霰

を車川の流を流るや里は太
武たれ是了果とく主敷り
を子あねとくも雲の義よ
山風や雲の心ぬるす身
月七亦途かゝ思ふあや
ふもつ火の葉路まぢる葉小
かゝる舟渡の灯は白くけ
正妻の代くはくす神出唄
西へね七折るあり里神楽
息はや福くすかゝる
龍世のたをくす一掃之の里神女

漢柳 風香 暮々太 大魯 小柳 柳葉 嵐雪 雀鳥 秋柳 文足

神樂

神楽女也子舞う持る歌せむ

牛心

鉢扣

今か一季より乃く一鉢たき
まゝの身くよ例の雲ぬけの鉢打
あふふとあふおもけり鉢たき
樽あえてく息をくしをりてお
寂しあふ宗者あふ一鉢敲
飛込てくひさこふ位在をちたき
傘かゝるおとのお徳や鉢打
鉢身とあふ瓢やちちたき
横きく下着中鉢たき鉢打

嵐雪 夷色 薬古 松栞 乙児 司丸 吐月 砂月 雲松

石花

下手もかゝ上もかゝるは神打
もかたもかた部部とまねり
身を打よ下打とくふは神打
ふまのふ石花かゝしはあめ
似蝶の清梅淡一後お乃塔
心

垢子磁のつめふも赤今下ゝ赤
出胸

十二月

寒々菊

寒々きくや水色花水のつる水
葉古
寒々もまや寒々もまやせし強の先
女花淡

寒々声

寒念佛

寒々声を以切時り鬼を介
寒々声の恨りぬしは似蝶
道指を記きおし何りきき仏
天盾

おまに中ふあり何りきき念佛
夢太

角々あり大何何り何りき念佛
玉庭

礎に泣 おし何んぞおふつ
雪珊

下へおぬおのこおはしき念佛
完未

又二つ門くくあり寒念佛
子交

眠江
秋色

穉ハヤ穉の強仕も飯中子
油花

臘八

俳名

備ハハおひて足れを望む
 臘ハハ羽而を味等の才一飛
 佛名やおふぬふ七死の奴
 仏名や清りせし八花を雪
 仏名や神の乱もるまの縁
 仏名よふらうてすや雪の影
 桜久々花をさしとるまの
 高きや人に果えりおまを
 天子にや一雪ふとく時春
 心ししとまをいし申柳や
 朱つふふふとまをぬきぬき

葉之
 林 丈
 深心
 文三
 秋杵
 達琴
 葉太
 以月
 不雪
 葉太
 柳家

節季候

年内春

追儼

年新

師走

有明やまをさるるの月
 まるまると隅田の年波
 厄拂 泣ハ隈なき月
 雪ふやおきくちきねの雪
 流くまをさるるまをよ
 陵を掃てとるまを木
 山伏のまをさるるまを
 下後よおひくまを師走
 雪のまをさるるまを
 杉風や世よまをさるる
 急う雪くまをの人は海

吐月
 沙羅
 薺太
 東鳥
 完未
 都英
 嵐雪
 寒松
 方壺
 蓼太
 素丸

年忘

傳七世より持てられたる記
 吐月
 死るに無き先へ記さるる
 分年
 おまに汲年忘井の後家
 蓼太
 二枚六子の子母いふ
 月守
 みより子に孫えて出い
 夏炉
 以りきれ也案れおの夜いぬ
 班象
 年忘さるるをさるる少松さし
 宜妻
 孫ぬりに孫は六をり
 以月
 信中
 忘
 柳莊
 不塞馬
 宜妻
 煙火を基盤して流さるる
 宜妻
 煙火を基盤して流さるる
 宜妻

餅搗

餅つきや多かりてきて二月の陽
 吐月
 鳴りし底ハ令り餅の白
 升古

行年

りとやとやとつれの松も落
 普成
 海もろくおのりや
 蓼太
 ゆく年や磯人町此おのり
 午心
 けとやいや
 物我

年の暮

猿猴のよふまをかりて年の暮
 嵐雪
 抄小木のぬり年暮さるる年の暮
 更登
 完未

波豆伝言の河もむつうや年此言
つらむれ海つらむれとくぬれ
小娘の梅くくもや雪一りくき
西行乃いつちりくん年此言
畑の葉れんつよきよ雪ぬれ
お好むるに静き一年の言
年ぬれ車ハも羽子あつらう

蓼 大
吐 月
寥 松
其 桂
蓮 佐
普 城
完 来

大晦日

みま子ね接ぎ葉一古無日
今忘れろ梅小本セハ一太世日
雪のぬれ庵員一太三十日

午 心
任 柳
祇 風

終年

終年ヤ人を一多てきり 降 不 騫

岡見

岡見すく妹つくぬぬ小家の門
我星此家よむふれ星と心

嵐 雪
一 鷲

和布刈

宝 舩

二艘ハ八欸古舟ありれら重うぬ
舟の代よ陽すたれちたう船
梅一アん入そあも雪のいもぬれ
と一の雪ぬ山と降ふ但やう

吐 月
完 来
蓼 大
午 心

年尾混交

魚餅の毒中をくぐりて魚の宿
魚 二
舟かきくそきふ灯七とりしり
魚 汶
おきまるとしれくそきふ家好
午 心

極月也門にづく在御る
寥 松

そふ封き。年姑小判のき
了 輔

風流と字阿との名ありふ
蓼 太

鞍部

酒もあも忘き川た。念佛ハ
沙 羅

嘘や何よそれ名ふ人たを祝
寥 松



笠句類聚後

上野をさきさきする四十町さうめ川
さきさき尾久といふ里あり 笠川乃
泳みたふてのりさいと清く白く
とる 菊火をさきさき魚津をさる
心ちすさむ本傳ふる言ふに麻
うつめらるあを色えむいとむすをを
まらふるあを地なるまを

いつの冬もやまこふさしむ就おてる備の
業とらき耕せるとやうにうたあう
朱氏の老徳を孫承するものあら
社を重修する御事をさし給はれ
人の心結たまつらまよ外おさあらま
おのり藏かこしたくめさ、美濃志ぶの
かりともくしるるを給あるこのや
深川子携り申きてお墨子剛にや

求ふ老をまかすにひなはしむるは
いつてあいまむいまむてあしたま
手まこもらゆあしを物給るのたゆ
を物申て家より市に買ふる
人ももつんきあはれをたまこい
業子もすちあしとあはれ
いしむるふてを屋やう事
成るよりあはれを屋やう事

來之至也亦不之
 字化下印在林七月
 高也

雪中梅



天下 一物 登龍丸 一包代百文

此丸專治一切... 凡患此症者... 宜早服之... 功效如神... 每盒一元... 總發行所... 上海... 某某藥房... 謹啟

東叡山御書物所

江戸下谷御成道

青雲堂英文藏製

東叡山御書物所	出雲子文地所	要子古字居江	大系次多系
大板山林稿	河内系散多系	出羽山形十日所	大板居次多系
渡府江川町	山内系伊原系	信子移寄山形所	和名居武古系
伊勢松坂市場	道具系重系	日松系	及松居松系
新町橋所	天浦系武系	日松系古系	小外系古系
出雲子系	戸種系只物	日上四	付居系古系
伊勢松坂市場	中津系伊物	越後系系	扇系七古系
長系松坂町所	山内系孫十系	日古系	信系古系
内火山町	玉系系系	下野依野大の	越城系古系
日越野山町	角系系物	半陸土浦	檜系古系
要子仙居山町	伊勢系古系	古字系古所	伊系古系
日越野山町	伊勢系古系	伊系古系	英 丈 然

